

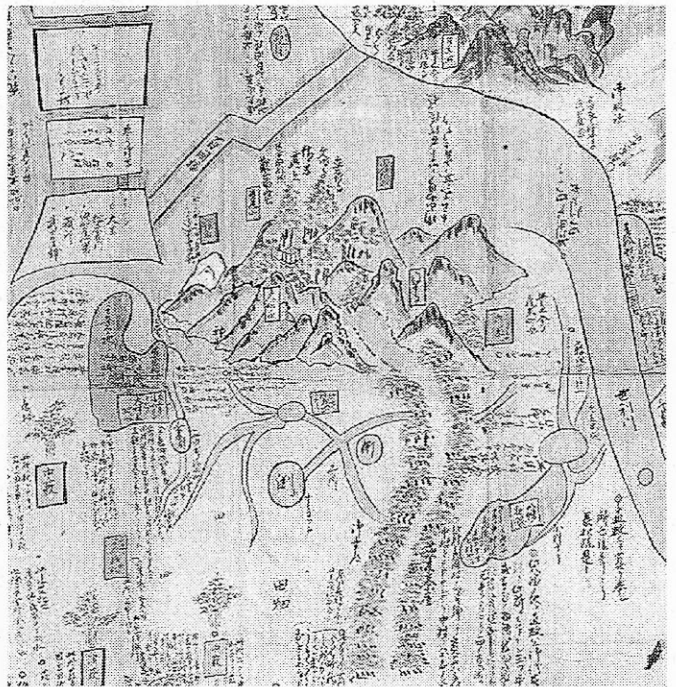
いま琵琶湖のほとりにある彦根山に慶長8年（1603）に造られた国宝彦根城がそびえています。そこには築城に際し城下に移された観音信仰で知られる寺院がありました。寺院の名は「彦根寺」といい、養老4年（720）、藤原北家の祖、藤原房前の守護神で金色の亀に乗った観音を本尊として建立されたことに由来します。築城以前にこうした由来の寺院があったことから彦根城は「金亀城」とも呼ばれ、いまも地名や幼稚園などの施設に「金亀」の名が残っています。

この寺院に関する詳しい資料は乏しいのですが、『扶桑略記』承暦3年（1079）の項に、近江国犬上西郡の「彦根山西寺」で盲目の僧徳満が祈願したところ、たちまち両目が治ったという霊驗あ

らたかな観音信仰の寺院が紹介されています。この評判は、別の文献『中右記』や『百練抄』にも登場します。先の「彦根寺」が文献の「彦根山西寺」と同一であるかどうかは意見のわかれるところですが、さらに別の文献『阿婆縛抄』には、一条院の御世（986～1101）、彦根寺は近江国犬上西郡にあつて、本尊は3尺（約91cm）の聖観音像、その像の足裏には「稽門兼之作」と銘があつたことを記載しています。既に徳満の70年ほど前にはかなり著名な観音像が「彦根寺」に安置されていたとされ、この観音像が「彦根山西寺」の観

「彦根山西寺」

『彦根絵古図』（滋賀大学経済学部附属史料館所蔵）



音として知られていたと思われ
れます。

その後、「彦根寺」に関する記録は少なくなりますが、残されたわずかな手掛かりからその後の寺院の様子を垣間

見ることができません。東近江市の百済寺には鎌倉時代に彦根寺より移された密教法具が伝わり、また、城下移転後の北野寺には室町時代に彦根寺への安置のためにつくられた

役行者像が残されています。さらに、『熊野那智大社文書』には応永2年（1468）頃に彦根寺が西国巡礼や熊野参詣と関わっていたことが記され、寛正6（文明18年（1465）～1486）には将軍家祈願所として密教神愛染明王への祈禱をおこなっています。この頃には幕府との関係を深め、観音と愛染明王を祀（まつ）って修験道とも関わりがあったことがうかがえます。

現在、この彦根寺をはじめ彦根築城前の様子を知る手がかりはほとんどありませんが、わずかに数点の絵図が残っています。このうち『彦根絵古図』には彦根寺と観音堂が示され、人々が観音堂への巡礼に往來して現在巡礼街道とも呼ばれる「御幸道」なども見ることができません。

彦根寺の跡地は現在「観音台」、「北野寺」門前の通りは「観音堂筋」と呼ばれており、在りし日の寺院の様子をほつふつとさせてくれます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 中川治美）

霊驗あらたかな観音信仰